

ISO/TC20「航空機および宇宙機」

第50回モスクワ国際会議報告

ISO/TC20「航空機および宇宙機」国際会議にISO/TC20国内審議団体として参加したので、報告する。

1. 概要

開催場所：エアロスターホテル モスクワ
(ロシア)

開催時期：2016年10月20日(木)～21日(金)

ISOは現在246のTC(うち2はIECとの共同TC)があり、スイスを本部に活動を行っている。TC20は航空機および宇宙機を中心とした技術委員会である。範囲は、「航空機および宇宙機を構成するないしは運航するための、またこれらの機材を運用、整備するための材料、部品及び装置の規格」である。投票権を有するP(Participant)メンバー12カ国、投票権のないO(Observer)メンバー28カ国で構成され、分科会(Sub Committee)が11設置されている。

今回のTC20総会参加国は、米国、英国、ロシア、フランス、ドイツ、中国、日本の7か国(参加者27名)であった。日本からは5名(齋藤(KHI, TC20国内委員長代理)、藤貫(SJAC)およびSC14WG4のメンバー3名)が参加した。今回は、TC20と並行してSC4「航空宇宙ボルト・ナット」、SC6「標準大気」、SC8「航空宇宙用語」、SC14「宇宙システム及び運用」/WG4「宇宙環境」の分科会及び作業部会が開催された。

2. 議事内容

議事次第に従い、TC20の現況、各SCの活動状況等の報告および討議が行われた。主な内容は次頁の通り。



写真1 ISO/TC20総会

a. TC20現況

- ・ TC20にモンゴル及びスペインがOメンバーとして加盟し、Oメンバーが28カ国となった。
- ・ TC20国際会議やSC国際会議への出席者が少なくなっており、どのようにして参加者を増やしていくかが課題として挙げられた。

b. 各SCの活動状況等報告

各SCから以下の報告があった。

- ・ SC1「航空宇宙電気系統」：日本が提案している「LEDタクシーライト」の規格化が進んでいる。
- ・ SC4「航空宇宙ボルト・ナット」：新領域への展開はないものの、中国から評価方法の提案があった。
- ・ SC6「標準大気」：現在Pメンバーが4か国と少なく、日本の参加を期待している。日本の参加について要請があったことをJISCに報告することとした。
- ・ SC8「航空宇宙用語」：SC国際会議の参加者が少ないので、積極的な参加を期待している。
- ・ SC9「航空貨物および地上機材」：新たにPメンバーにスロベニアが加盟した。
- ・ SC10「航空宇宙用流体系統及び構成部分」：ブラジルがOメンバーから脱会した。
- ・ SC13「宇宙データおよび情報システム」およびSC14「宇宙システムおよび運用」：活発に活動しているとの報告があった。SC14ではカザフスタンがPメンバーからOメンバーになる。
- ・ SC16「無人航空機システム」：WG1の新コンビナーの候補者を探している、今後、大型機や市街地運用へ規格適用の範囲を拡大していく、ニュージラ

ンドがPメンバーになる、ブラジルに参加を要請する等である。

- ・ SC17「空港インフラ」：SCの担当範囲およびワークプログラムの検討を継続している。
- ・ SC18「航空宇宙材料」：2017年春に第1回会議を開催するにあたり、各PメンバーのSC18の担当者を決めるよう要請があった。

c. 同時開催の分科会

- ・ TC20総会と同時開催されたSC14/WG4とSC6/WG2「航空大気」の合同の作業部会には日本からは五家氏、北沢氏、豊田氏の3名が参加し、地上から宇宙の領域である高度120kmまでの大気データをシームレスに提供することに関する検討が行われた。
- ・ また、SC14/WG4作業部会では、宇宙環境における帯電の問題と放射線の影響に関する規格案11件（うち日本提案5件）が審議された。

d. 次回会議

- ・ 次回のTC20国際会議は、2017年9月20日（水）～22日（金）に、米国のワシントンD.C.にあるAIA本部にて開催する。
- ・ 2018年の国際会議は日本で開催することを提案し、承認された。

3. 所感

航空機の分野では、FAAやEASAの基準、SAE、RTCA等の規格が制定され、既に世界のデファクトスタンダードになっていることから、必ずしもISO規格が主流となっていないため、各国の航空機関連企業においてはISO独自の規格制定活動についてあまり積極

的ではないように見受けられる。一方、新規ものの規格制定や、欧米各機関によって制定されている各種規格のハーモナイゼーションをとり、国際規格としていくことができるならばISOは非常に有効である。

会議の参加者は、10年、20年に渡る活動経験を有するエキスパートが多い。日本が国際規格の分野でプレゼンスを示し貢献していくためには、この分野において世界で活躍できる人材を育成していくことが必要である。ま

た、各国からは航空機を製造している国としての日本に対して、より積極的な参加が期待されている。よって、これらに応えると共に、我が国航空関連産業の国際競争力の維持・強化に資するという観点からも、航空宇宙関連の国際規格制定活動の継続が重要であることを再認識した。

国内委員会でご協力をいただいている各委員のご尽力に感謝する。

[川崎重工業(株) 齋藤 雅樹、(一社)日本航空宇宙工業会 藤貫 泰成]

